

1 物語(1) (P25)

確認問題

- (1) 新幹線
- (2) エ
- (3) ①(例) ラックは、放して自由にさせてあげたほうがいいという考え。
- ② やさしい心
- (4) ウ
- かいせつ
- (1) 「新幹線しんかんせんみたい」に「風ふうみたい」の「ふふみたい」は、「ふふのように」と同じ意味のことばで、あるものをべつのもにたとえて表すときに使われます。
- (2) 先生の「(ラックを)箱に入れようか」ということばを聞いた「ぼく」は、ラックを箱に入れるのはかわいそうだと感じています。そこで、ラックをかばうために、ラックがいろいろな物をかじるのは成長していく上で仕方がないことなのだということを、みんなにわからせようとしています。
- (3) ①「放して自由にさせてあげたほうがいい」という意見に、みんなは「はあい」と手を上げて同意しています。答えを書くときには、「ラック」を書き落とさないようにしましょう。
- ② このあとの愛あいの言葉からは、みんなの「やさしい心」がいっしょだから、みんなが同じ考えになったということがわかります。
- (4) 先生は、クラスの人々から意見を聞いて、ラックをどうするか決めるようとしています。

練成問題

- (1) ① カ ② オ ③ ア
④ エ ⑤ ウ ⑥ イ
- (2) なめてやった。
- (3) (例) 兵隊に鉄ぼうでうたれたから。
- (別例) 鉄ぼうのたまに当たってしまったから。
- (4) (例) 鉄のわなが足にかみついたから。
- (別例) わなにかみつかれ、いたかったから。
- (5) ① 兵隊たち(兵隊)
- ② (例) 兵隊たちの注意を自分にひきつけて、動けないちびこと母さんぎつねが見つかからないようにしようと思ったから。
- (別例) ちびこがわなにかかっているの、兵隊たちに自分のことを追いかけさせ、遠い所へ行かせようと思ったから。
- (別例) 人間が自分を鉄ぼうでねらってくれば、ちびこと母さんぎつねを助けられると思ったから。
- (6) イ
- かいせつ
- (1) それぞれの の前後に書かれている様子や動作からふさわしいことばを選びましょう。
- (3) この後に「何回か鉄ぼうの音がした」とあるように、「ダーン」は兵隊たちがうつ鉄ぼうの音を表しています。
- (5)・(6) 自分の身をぎせいにして、人間(兵隊たち)から家族を助けようとする父さんぎつねのすがたや、自分もけがをしていながらちびこのためにえさを運んであげた母さんぎつねのすがたから、どんなことが感じ取れるかを考えましょう。

2 物語(2) (P659)

確認問題

- (1)(例) 赤い大きな目をした人間のすがたで、青いぴかぴか光る服を着ている。

(2) エ

(3) ウ

(4) ① 戦争 ② 平和

(5)(例) 地球をほろぼしてしまうこと。

(6)(例) みんなの心を合わせて、戦争をなくし、地球をりっぱな住みよい星にしておくこと。

(別例) 地球人が、にくみ合いをやめて、地球を、戦争のない星にして、もっとも大切にすること。

かいせつ

(1) 直後の「三人の変な男」が宇宙人です。この変な男たちの様子が書かれていた部分をさがします。

(2)・(3) 宇宙人は、地球に来る前に、あらかじめ地球人についての報告を受けていました。その報告にあった「地球人は、かしこくなく、勇氣もなく、残こくだ」という内容と、目の前にいるよしこの、宇宙人であることを見破ったかしこさ・宇宙人をおそれない勇氣・動植物が大好きなやさしさなどが、まったくちがっていたので、かれらはびっくりしています。

(4)・(5) 宇宙の平和を守るために、宇宙人は、戦争のために科学を使う地球人を、今のうちにほろぼしてしまおうと考えています。

(6) 「心を合わせて、地球をりっぱな住みよい星にする」「戦争のない星にして、地球をもっとも大切にする」をまとめます。また、この「宿題」の内容は、作者の願いでもあります。

練成問題

(1)(例) 山へアケビをとりに行く。

(2) ① ア ② イ ③ イ ④ ア ⑤ イ

(3)(例) 学校をさばることに慣れていて、悪どえが働くところ。

(別例) 学校をズル休みしたことが何度もあるところ。

(4) イ

(5) ア

(6) イ

かいせつ

(1) 設問をよく読んで、「どこへ」「何を」の両方を書き落とさないように注意しましょう。

(2) 「この二文字(二度胸)がないといわれては男がすたる」「それまでぼくは一日として欠席したことがなかった」「夢中でかけずりまわり」「母の顔がうかんだ。く」などから、「ぼく」の心の動きをつかみましょう。

(3) 直前の「かれらはこういうことに慣れているみたいだ。こういうことは一度や二度ではなさそうだ」の「こういうこと」が指している内容をまず考えましょう。先ばいたちは、それまでの経験から、遊んだ先から物を家に持ち帰るとズル休みがばれるという知恵を身につけています。

(5) 母は「まあ、たまにや(学校をズル休みして遊びに出ても)いいでねえか」と言っています。

(6) ズル休みに対する「罪意識」をどうしてもすてきれないきまじめさを持ちながら、「先ばいの手前、虚勢をはっ」ている「ぼく」の様子からは、度胸がないと思われたくないという負けん気の強さが読み取れます。

3 伝記・脚本 (P 10 ~ 13)

確認問題

- (1) ア
- (2) イ
- (3) ①(例) パリに出て医学の勉強をしたいという気持ち。
- ② エ
- (4) (例) 毎月、パリの姉あてに送金していたから。
- かいせつ
- (1) ロシアに支配^{しは}され、ポーランド語を使うことができない中で、「ポーランド語を習い、ポーランドの歴史^{れきし}を学んだ」ことや、「大きく変わったら、この国(＝ポーランド)のためにつくそう。」というマリヤの気持ちから考えます。
- (2) 直前のだんらくに書かれていることから、当時のマリヤたち一家の生活がどのようなものであったかを読み取ることができます。
- (3) パリに出て医学の道へ進みたいのにもかかわらず、家の事情^{じじょう}で、母代わりをつとめて、家にとどまっている姉のブローニャを見て、マリヤは、自分がやりたいことをできない姉をかわいそうに思っています。
- (4) 「そのためにサイフはいつも空っぽで」とありますから、この「そのために」の指していることがらが、当時のマリヤにお金がなかったことの原因になります。

練成問題

- (1) エ
- (2) A(例) 釣り竿と鉤 B(例) 弓
- (3) ①(例) 海彦に弓をくれること。
- ② イ
- (4) (例) 鉤をなくしたこと。
- (5) イ
- かいせつ
- (1) このあとの部分からは、山彦^{やまだ}が、海彦^{うみひこ}に釣り竿^{つりざお}を返すのをしぶっている気持ちを読み取れます。兄から釣り竿を出せと言われて、こまっていた山彦の様子にふさわしいことばを選びましょう。
- (2) ふだん魚釣りの仕事をしている海彦の道具は釣り竿と鉤^{はり}です。それに対して、ふだん狩^かりの仕事をしている山彦の道具は弓矢です。この日、二人は、おたがいの道具を取りかえ、なれない仕事に出かけています。
- (3) ① 直後で「おれ(＝海彦)に物をくれるなんて」と言っています。「物」とは具体的に何かを明らかにして答えを書きましょう。
- ② 山彦は、海彦の釣り道具である鉤をなくしてしまったことを気にかけていて、そのおわびとして自分の狩りの道具である弓を差し出し、もらってもらおうとしています。
- (4) このあとに海彦は釣り竿を調べて、鉤がなくなっていることに気がつきました。山彦は、そのことを言い出すことができず、はつきりしない態度^{たいど}をとっていたのでしょう。
- (5) 海彦のせりふ全体から、鉤をなくしておきながら、そのことをかくしていた山彦を責^せめている気持ちを読み取ることができます。

4 詩 (P 14, 17)

確認問題

1 ア

(2) ①(例) 土手のじょうさまがいねむりをしていること。

(2) ②(例) ヒバリは歌をうたうし、お日さまはばかばかせなかをあたためるので、気持ちがよかったから。

(別例) ヒバリが歌をうたい、お日さまがばかばかせなかをあたためるのが心地よかったから。

(3) イ

かいせつ

(1)・(3) 「ヒバリ」が季節を知るためのヒントになりますが、詩全体から、春ののどかさを感じ取りましょう。

(1) ①(例) 人々が喜んで、にぎわっている様子。

(2) ②(例) いわしの大漁だったから。

③ とむらい

(4) ④(例) 赤ちゃんの手はもみじのようだ。

(2) イ

(3) ③(例) ことばの音の数をそろえて、詩にリズムが感じられるような工夫。(別例) ことばが七音と、五音のくり返しになっていて、調子よく聞こえるように工夫されている。

かいせつ

(1) ③・(2) この詩の作者は、浜の「祭り」と、海の中の「とむらい」という二つのたとえの対比によって、海の中の深い悲しみを強調していると考えられます。

(3) 実さいに音読してみて、詩のリズムを感じ取りましょう。

練成問題

1 ⑦

(2) エ

(3) イ

かいせつ

(1) 第一の連では「イス」が、第二の連では「イス」にすわった人が、それぞれ中心になっています。

(2) 「イス」が夢を見る、というように、人間でないものの様子を人間にたとえてえがいた詩です。

(1) イ

(2) ②(例) はい色の空から、たくさんの雪がふってくる様子。

(3) ア

(4) ① エ ② ⑪

(5) ① ガ ② はね ③ りん粉

かいせつ

(1) 「千万の白いガ(雪)」、「あとからあとから」というところにも、数え切れないほどの雪がふってくる様子がえがかれています。

(4) 「ちらちら」は、細かいものがまい散る様子をあらわす語、「くるくる」「くるり」は何か回転している様子を表す語です。

(2)・(5) この詩は雪をガにたとえることで、生きているような雪の美しさをうまく表しています。